

# 文化的な土壌改良が 大阪の地盤沈下を解決する、か？

## 橋爪節也

Hashizume Setsuya

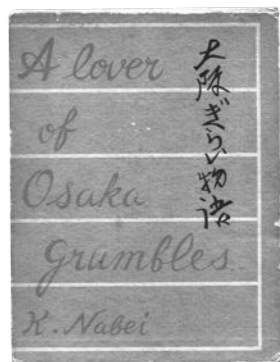
### 大阪を「ルネッセ」させる 艱難辛苦の道のり

最近の大阪にいささか嫌気がさしている。洋画家・鍋井克之が随筆集『大阪ざらい物語』（1962年刊）の装釘で、“A lover of Osaka grumbles”と書き込んだように、大阪が大好き

な人間が、ぶつぶつ愚痴（grumble）っているのは、大阪人の伝統かも知れないが……。

「地盤沈下」という言葉も、すでに昭和の雰囲気横溢だが、わが町を少しでも浮上させるため、私も大阪市の新しい美術館建設の準備室に18年間、在籍し、その後は大学で美術史

大阪を中心とした近世・近代美術を研究し、その普及・発展に努めてきた、橋爪節也大阪大学総合芸術博物館教授。現在・未来に過去の文化をつなげる難しさに苦心しながらも、地道に活動を続けてきた橋爪氏は、「ルネッセ」の協力者として心強い存在だ。これまでの活動を振り返りながら、未来に向けての視座を提示していただいた。



鍋井克之『大阪ざらい物語』。

を教え、大阪の文化芸術の普及や発展に微力ながら尽力してきた。が、皆で大阪を「ルネッセ」させよやまへんかと言われても、艱難辛苦は如何ばかり。優曇華の咲きたる春を迎えるとも思われず、老いた敵討ちの浪人の心境の如く、年齢とともに面倒くさくなってきた。少年時代に衝撃的だった小松左京『日本沈没』の名言「何もせんぼうがええ」も思い起こされる。

しかし、そうは言ってもCELの提唱する「ルネッセ」の企画には、なぜだか、これまで色々参加させてもらっている。

上町台地 今昔フォーラムでは、2015年3月、「とっておきのコレクション・トーク／憧れの百貨店・商店街と大阪の都市居住文化」で、「大大阪」時代を中心に百貨店文化を話した。2017年2月は、川崎巨泉や山内神斧、森田乙三洞ら「趣味人」と郷土玩具を「しゅみじ

ん」のまち・大阪レビュー／郷土玩具から広がる「趣味人」ネットワーく近代・大阪の創造力」でとりあげた。

2018年3月、大阪の出版をテーマに「知」の舟を漕いで／上町台地発、「本」をめぐる時空の旅へ〜ことばと本を愛する人たちの迷宮都市再び〜、同年9月に、味噌汁坊一禅と名のつて清談会を開いた。橋爪節也をとりあげた「復活！現代版『汁講』II『知る講』」で司会や資料展示を行った。各回の内容は、CELのホームページで御覧いた



はしづめ・せつや

1958年、大阪府生まれ。大阪大学総合芸術博物館教授、同大学院文学研究科兼任。専門は日本近世・近代美術史。東京藝術大学助手から大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室学芸員を経て現職。主な著書に『モダン心斎橋コレクション』『大大阪イメージ』、共著に『大阪の橋ものがたり』など。

だきたいが、刊行された「上町台地 今昔タイムズ」号外全10号のうち4号に私は関係している。

グランフロント大阪の都市魅力研究室での大阪万博・大大阪に関するセミナーや、「ナレッジキャピタル大学校」で講演もし、情報誌『CEL』118号「ルネッセ」耕——文化を問い直す」にも、『浪花百景』——まずはヴィジュアルの迷路に踏み込んでみる」を寄稿した。

### 忘却された文化芸術の 歴史的厚みを取り戻すために

ずばらなわりに色々仕事をしたが、

フォーラムで依頼されたテーマ——百貨店文化、趣味人、出版、晁鐘成は、政治経済はいうまでもなく一般的な美術史でも、脇道のような特殊なものに見做されがちである。しかし、近世以降、現代に至る大阪文化を考える上では、決して脇道ではなく本筋を行くものであり、その重要性に気づいたのは、2005年に大阪市立近代美術館建設準備室が主催した「大大阪」誕生80年記念《モダンニズム心斎橋》展」のときである。展覧会では心斎橋筋を中心に、道頓堀や難波、千日前にも連なる繁華街の歴史と文化を掘り下げ、多くの

作品や資料を再検証することができた。一方、世間では大阪文化の分厚さも知らず、誰かの言いなりになった軽薄なステロタイプの大阪のイメージが吹聴されていた。歴史的な文化芸術の厚みを忘却して、大阪の「地盤沈下」を解決するも何もないものである。

ように懸命に踏ん張っていたつもり大阪の地盤は、すでに沈下しきっていたようだ。CELの提唱する「ルネッセ」の理念は「過去を掘り起こし、本質を読み込み、現在・未来へとつながる」であり、「再起動」へとステージが進んでいる。そこで「ルネッセ」の即効薬を私は知らない。それはその道の専門家が提起するだろう。

私から提言できるとすれば、痩せ細った土地に再び豊かな稔りをもたらすには、土壌改良を行うしかない、ということである。

歴史ある大阪の文化的土壌をカラカラに干からびさせ、衰えさせたのが、歴史を学ばない（もとより知る気もない）、目先の効率主義、文化軽視の姿勢であることは、心ある大阪人の誰もが感じている。間違っても土壌そのものを入れ替えるのではない。「ルネッセ」を支えるための土壌を、古い土も最大限に生かして粘り強く耕し、肥やしていくのである。

そこで重要なのが「街の記憶」を呼び覚ますことである。かつて蓄積されていた文化的土壌の厚みを回復させるうえで「街の記憶」は、個人の人生を超えて遙かな過去にさかのぼる養分である。同時に、未来の「記憶」をも夢見させる引き金になるかもしれない。



第10回上町台地 今昔フォーラム「復活！現代版『汁講』＝『知る講』」では、橋爪氏を中心となり、晁鐘成の人物像や業績などを解説した。



天保亀の模型。左の『天保山名所図会』の図から橋爪氏がブロンズ粘土で考証再現した。



『天保山名所図会』の巻末に晁鐘成が掲載した、天保山の形をした亀の菓子器の広告。「天保山名器蓬菜型畷図」の題に貴人のもっともらしい和歌がしたためられ、右下には「熨斗鎮、文鎮、菓子器等の奇品也、諸君のもとめをこいねがう」（原文は漢文）と熱い宣伝文が書かれる。